

西夏語研究と法華経(Ⅱ)

西田龍雄

1. 西夏語の誕生と終焉—その生涯

初代皇帝李元昊は、西夏国を建国して(1032年)直後に、対外的には国威発揚のため、国内的には部族間の結束と自国文化の高揚を目指して、それまで書いてきた藏語と漢語に替る新しい自国の書写語とそれを適切に表記できる書写体系の創作を命じた。¹⁾ その言語と文字を西夏語と西夏文字と呼んでいる。その事業は、迅速に進められそして見事に完成し、1036年にその成果を公布した。その結果、漢字文明圏の中の西北地域の一隅に新しい文字圏、西夏文字文化圏が出来上がることになった。西夏文字は新しい型の表意文字の提案でもあった。

西夏国を構成する各種部族はミ族、ミニャック族をはじめその大部分は共通の祖語から分裂した言葉と話していたが(いわば党項語の方言)相互に極めて近い特徴をもっていたと考えられる。²⁾ しかし音韻面、文法形態面にそして語彙形式でかなり相違していたに相違ない。例えばミ語とミニャック語の自称形式の間に次のような差異があることを指摘できる。

ミ族(彌)	ミニャック族(彌諾)
𐰇 mifi (上10)	𐰇 mi (上28) 𐰇 nīafi (上18)
𐰇 nīafi (平21) 黒い	ミ ← 黒い

西夏の自称はミ族では上声10韻mifiであるのに対してミニャック族では上声28韻miであった。‘黒い’は共にnīafiであったが、ミ族では平声で発音し、ミニャック族では上声で言った。

皇族を指す𐰇𐰇 ḡ^{wi}-mifi (平11) 嵬名のアとの音節mifi (平11) もその対

(2)

応形であった可能性が極めて大きい。魏のミ族の意(?)であろうか。³⁾

さて1036年に誕生した西夏語は、書写語として仏教典籍や中国古典の翻訳事業、そして独自の文学作品の創作を通して次第に推敲され、表現力を増大して発展した。惠宗崇宗仁宗の時代(1069年~1086年~1139年~1194年)に最盛期を迎えたが⁴⁾、やがて国力の衰えと共に危機に瀕し、1227年北方からの蒙古軍の侵入によって国家が滅亡するに及んで、その生涯を終えるかに見えた。

幸にして元朝の優遇を受けて新しい生命力が与えられ生き延びることになった。その原動力は元刊西夏大藏経の刊行である。

西夏の故地はチベットと同様に統制院(のちの宣政院)の管轄下に置かれ西夏人は色目人として優遇されたが、仏教をもって各民族の掌握を考えた世祖は西夏藏経版を大都において作らせた。成宗が即位するに及んで製作を一時罷めさせたが(1294年)、その事業はまもなく杭州の万寿寺において継続され、河西大藏経と称される西夏経3620余巻が完成し、西夏故地の諸寺院に施行された。西夏国滅亡以降70余年を経ている。

日本の善福寺所蔵の大宗地玄文本論やペリオ将来の西夏経、それに天理図書館蔵の残片などに記された願文からみて、この事業が完成したことはほぼ確かであろう。⁵⁾ その実物の一半がストックホルム博物館に現存するのを1970年に私は発見した。そこに所蔵された経典には『白上大国新訳三藏聖教序』がついていた。『仏説月光菩薩経』『仏説了義般若波羅蜜経』はじめ全部で六種の経典と巻首巻尾を欠き下半部のみが残る経題不詳の経典のほかに三種の断片(A, B, C)が残っていた。⁶⁾ 新訳とあるから正に西夏藏経作成の第二期に属するものを指しているのであろう。果たして実際には全体でどれだけの経・律・論を含みどれ程の分量が刊行されたのかは証明できないが、西夏の仁宗の時代にまとめた経・律・論の重刊と新たに翻訳した仏典を含む集大成であったと推測してよいであろう。この事業が遂行できたのは、当時14世紀中頃には西夏語はなお健在であり、西夏文字もまだ十分記憶されていたことを示している。

そののち33年を経て、1345年になって北京から西域に向かう関所居庸関に過街塔(内部に通路があり通り抜けできる仏塔)が建設され、その内壁に六体の言語と文字をもって陀羅尼経典と造塔縁起を刻む事業が行われた。六体刻文の中に西夏語西夏文字が含まれていた。滅亡後すでに118年を経ているが、曾ての西

夏国人はなお有力な民族集団の一つとして認められていたためであろう。その西夏文は動詞のB語幹はすでに消失し視点文も衰弱していたが、二系列の接頭辞は共に活用され西夏語の基本構造は十分に保持されていたと思える。⁷⁾

居庸関刻文以降、明代に入って洪武五年(1372年)の紀年のある高王觀世音經感徳序(29行)(故宮博物院蔵)が紹介されているが、その発願文には接頭辞系列Bはなおよく使われていた。⁸⁾

遂に西夏語生命の終焉の接近を告げるのは北京の南方、保定の韓庄から出土した八面の石幢、相勝幢である。⁹⁾ 大都に移住させられた西夏人の後裔が建てたものであろう。弘治15年(1502年)造とされるから、西夏国滅亡以後275年を経ている。その西夏文は、接頭辞系列Aの使用はあるものの、動詞のB語幹、したがって視点文は全く現われず、官職名・人名など固有名が西夏文字で列挙されるだけで文字のみが綴られた脱穀のような印象を与えている。あるいは言葉はほとんど忘れられ文字のみが伝承されていたのかもしれない。いずれにしてもその後数年を経て、西夏語はその一生を終えたものと考えられる。この書写語は1036年に誕生して約450年以上生存していたことになる。¹⁰⁾

私は書写語の消滅は自然言語の消滅とは異なった次元で考えなければならないと思っている。

2. 文字組織の分析と言語体系の復元

筆者は西夏語と西夏文字の研究を1950年代から始めたが、つねに①文字組織の分析と解明と②言語体系の復元の二つのレベルで扱い、そのバランスを考慮して進めてきた。言語の研究に当たって文字のレベルと言葉のレベルを混同してはならないことは鉄則である。しかし一方の進展が他方の推進を促すこともまた事実である。とくに西夏語と西夏文字の場合は、西夏文字を通してしか背後の西夏語を探り得ないから、両者は限りなく密着して関連し入り込んでいる。字形の違いは何らかの言葉の形式上の相違を反映しているのである。¹¹⁾

私の発案した双生字・複双生字の考えは大きい効果をもたらした。¹²⁾ 類似した字形を具えた双生字は言葉のレベルの種々の連合と対立をになっていた。しかしこの問題にはここでは立ち入らない。

字形の違いは言葉の単位の違い、つまり音形式の相違を反映している。平た

く言うと、ある字形をどのように読んだかはその字形が言葉のどの意味単位、文法上の単位に当たっているのかが問題になる。したがってそれはこの言語の音韻体系の復元と密接に結びつき、引いてはこの言語の系統論の研究とも深く関わってくる。私は初期の段階、1960年代に主に字書『同音』の組織をもとに音韻体系の再構成を試み¹³⁾、その後80年代に韻図『五音切韻』と韻書『文海(宝韻)』『文海雜類』の組織を大きく考慮してその修正改訂案を提出した。¹⁴⁾その後その修正改訂案を使っているがなお検討すべき事柄がかなり残っている。主な点は、①平声韻小類と上声韻小類の対応関係の再考、これは上声韻声母の復元に関する。②形態論的視点からの声母韻母の再考である。例えば a. 自動詞有声音：他動詞無声無気音、b. 非使役動詞非緊喉母音：使役動詞緊喉母音などの対立関係に基づいた声母の推定である。¹⁵⁾これらの問題の検討は近著において論じたいと考えている。ここでは各文字が示す意味について、法華経と周辺資料を使って基本的な問題を考えてみたい。

『三才雜字』『同義一類』『番漢語要集』といった資料は当時の西夏人が遺した研究成果であって¹⁶⁾、いうまでもなく意味解明にとって重要な資料であることは疑い得ないが、ここでは考察の外に置いておきたい。

3. 意味の解明

意味の認定は単語集の活用のほかに、字書の注、韻書の解説が重要な根拠を提供するが¹⁷⁾、決め手になるのは何といたっても二言語対照資料による既知の言語形、たとえば漢語・蔵語との対照関係である。

まずは「仏」の認定という簡単な例から見ていこう。

𐽄 が仏に当たることはモリスの段階でわかっていた。この文字の研究の極く初期の段階20世紀初頭に判明していた若干の文字の中の一つである。¹⁸⁾これはモリスが発見したというよりはモリスが入手した法華経の原文の傍にすでにある漢人がこの漢字を書き込んでいたのである。今の段階で筆者はこの文字𐽄について次のことが言える。この字形は『文海(宝韻)』17韻に属していて *thafi* と読んだ。もともとは2音節単語 𐽄𐽄 *fʷifi thafi* として使われていたが、のちに *thafi* のみで仏を表した。本来の西夏語ではなく借用語である。*fʷifi thafi* は Buddha の漢字音写語 仏陀 を西夏文字に替えた形であり、漢語ではその第一

音節 bud にあたる形が以後仏として使ったのに対して、西夏語では第二音節 dha 陀にあたる形が仏を代表したと考えている。¹⁹⁾

西夏語仏典の訳者たちには、既存の頼れる訳語があった。漢訳であり蔵訳であった。梵語を直接翻訳したのではなかった。漢語の音写語を西夏語に置き換えた音写語を多量に造った。その中の若干は仏典の中の常用語となって確かな地位を得た。いわば仮名書き語である。

𐽀𐽁𐽂 thon loḥṇi 陀羅尼、𐽀𐽁𐽂 thafi moḥ 達磨のほかに意味で置き換える語も多く造っている。²⁰⁾

中でも事物の名称は把握し易い。手近なものに七宝がある。卷六随喜功德品 (18) の中に

金	銀	瑠璃	砗磲	瑪瑙	珊瑚	琥珀
𐽀𐽁	𐽀𐽁	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂
kɿe	ŋoḥ	naw ʔyɿ	ləw niēḥ	nʷi kʷin	ʃu khʷu	liḥ tšɿʷəw
(平66)	(上42)	(上20)	(平69)	(上38)	(平39)	(上60)
					(平32)	(平28)
					(平28)	(平29)
						(上40)

があり、卷四見宝塔品 (11) では、珊瑚・琥珀に替って真珠と玫瑰が出てくる。また序品には、摩尼や頗梨の音写語が使われる。

真珠	玫瑰	摩尼	頗梨
𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂
nʷi ʔyɿe	liuḥ noḥ	moḥ ṇi	phoḥ li
(上60)	(平34)	(上6)	(上42)
		(上42)	(平10)
		(平49)	(上9)

もちろん仏教の専門用語も法華経から多く引き出すことができる。ほとんどが漢訳語を意味で置き換えた形をとっている。たとえば六波羅密をあげよう。

布施	持戒	忍辱	精進	禪定	智慧
𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂	𐽀𐽁𐽂
ziḥ miḥ	kiē ʔieḥ	piḥoḥ žiʷ	khu ʷdžēḥ	šian ndien	sɿʔ
(平11)	(平14)	(平9)	(平39)	(平51)	(上41)
		(平1)	(平35)	(平26)	(上37)
				(上54)	

波羅密自体は音写語 薊薊羆 pɔh lɔh mih が定訳となっていた。

如来はつねに絳嶺 mior (平90) tɛ (平61) が使われ、直訳すると実来となるが、漢語の如来の訳ではなく蔵語(旧訳)の yang-dag-par gshegs-pa の訳であり古い訳語であったと考える。

世尊は薊羆 riur (平76) piu (平59) 世と尊ぶの結合形で訳されるほか、蔵語を置き換えた 羆羆羆 壤有出(渡) bcom-lan-hdas があり、梵語 bhagavat の音写語薄加梵を置き換えた 羆羆羆 phɔh khɔh xʷan や 羆羆羆 mbah ʔah mbah が使われている。後者は摩利天母總持に見えるが梵語形に近づけた新訳語であったのであろう。

衆生の訳語は法華経各巻を通じて 羆羆 ʔdʒan (上23) tshiu (上2) が使われる。この形は「情をもつ者」玄奘の訳語「有情」にあたる。羆羆 sefi (上33) ndiuhi (平3) (情・有) とする経典もある。菩薩を 羆羆 ʔdʒan-tsefi (上33) 「情を悟る者」と訳すのに似ている。(cf. WrT. *sems-can, byang-chub sems-dpah*)

これらの仏教用語は中国古典の訳文にも使われた。たとえば『六韜』の盈虚第二にある「以法度禁邪偽(法度を以て邪偽を禁じ……)」は(羆羆羆羆羆羆羆羆)「質直心を以て邪偽を摧伏する」と訳されている。質直、邪偽、摧伏、いずれも法華経で使われている。羆羆 tshia (上16) tu (平58) 羆羆 ʔdzəw (上38) lʷə (平94) 羆羆 kʷin (平32) žiʷ (上41)。最後の例は真実妙経では摧伏、鎮押があたっている。『六韜』の訳文はかなり考慮して造られており、文韜の六守、守土、守国の守の字に対して三種の訳語を与えている。

六守 羆羆 ʔiehi (平39) (六つの守、仁、義、忠、信、勇、謀)

守土 羆羆 ʔiɛ₂ (平34) 国土防衛

守国 羆羆 ʔzon (上47) 国家保持

これら三つの守の字 羆 ʔiehi 羆 ʔiɛ₂ 羆 ʔzon は互に関連することはわかるが、具体的な相違点は確定しにくい。

法華経では、羆羆 受持、羆羆 žon žɛ (平61) 執著などの用法がある。

4. 西夏語語彙の体系化

西夏語の語彙はまだよく体系化されていない。その研究には大きい課題がある。第一に西夏人の詩『月々楽詩』や『大詩』には目立った二つの層が見られることである。²¹⁾ これは西夏国の構成員、皇族・貴族・ミ族・ミニャック族の来源とかかわる大きい問題を反映している。筆者は現在のところ、I層とII層に分けているが、雅語層と推測するI層の正体はなお不明である。通常西夏語として扱っているのは、このII層の語彙を指していると考えていただきたい。

その中に、『番漢合時掌中珠』が代表する日常語彙のほかに上に扱った仏教用語があった。

漢語・蔵語からの借用語(音写語)も弁別し易いし、数詞、代名詞をはじめ十干、十二支、十二直、十二縁生、十二星宮、二十八宿など一連のセットをなす単語群も認知できる。

これらの単語形式は多くの資料の中から丹念に発見していく作業が必要である。十二縁生は、『十二縁生祥瑞経』はじめ若干の経典から次のように判明する。この法華経にもあるが残念ながら該当する西夏訳文が欠けている。²²⁾

無明	行	識	名色	六處	觸	受	愛
𐰇𐰏𐰣	𐰇𐰏	𐰇𐰏	𐰇𐰏𐰣	𐰇𐰏𐰣	𐰇𐰏	𐰇𐰏	𐰇𐰏
mbiū mefi	ndziñ	sefi	mieñ tsu	tshiew ndoñ	tsiū	?	dzu
(平2)(平36)	(?)	(上33)	(上35)(上68)	(平46)(上42)	(平59)		(平1)

取	有	生	老死
𐰇𐰏	𐰇𐰏	𐰇𐰏	𐰇𐰏
hl ^w ifi	ndiufi	wieñ	tar(?)si
(平11)	(平3)	(平12)	(上73)(平30)

十二直のセットは『新訳銅人鍼灸典』より抽出できた。²³⁾ 数詞は案外に厄介で億以上の大きい数になるとなかなか出てこない。不幸にして法華経には垓(億の一千倍)𐰇𐰏 mie(上68)はなく²⁴⁾、千の特別な形式も発見できない。𐰇𐰏𐰣 rar(平80)-naw(上19)²⁵⁾ しかし分数表現は卷五従地涌出品(15)にある。

𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 四分中の一分	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚𐰚𐰚 億万分中的一 (卷五 (15))
tir mb ^w aw khafi ʔa mb ^w aw	rir khi mb ^w aw khafi ləw
(平92) (上20) (平17) (?) (上20)	(上72) (上28) (上20) (平17) (平43)
四分の一	億万分の一

と表現している。(付記を参照)²⁶⁾

東西南北もセット語彙の一つであるが、その表現法と順序は興味深い。法華経の𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 *wi* (上61) *le* (?) *ʔzir*² (平86) *lə* (平64) は漢語の直訳であって、特別な表現を示しておらず、西夏語本来の順序は掌中珠にある𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 東西南北のように東から時計廻りする表現であったと考えられる。その中間の方位は法華経でもやはり時計廻りで訳されていて、蔵語の表現法と一致する。因に華嚴経では東西を軸とする漢語形を直訳する形をとっている。²⁷⁾

漢語	東南	西南	西北	東北
法華経	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 (南西)	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 (北東)
華嚴経	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚	𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚
蔵語	<i>shar-lho</i>	<i>lho-nub</i>	<i>nub-byang</i>	<i>byang-shar</i>
	東 南	南 西	西 北	北 東

人称代名詞はこの法華経の中だけで一人称𐰇𐰏 *ngafi* (上14) 𐰇𐰏 *mifhi* (上44) はじめ多種類出現するが、その使用例から相互の位相関係を決めることは難しい。

しかし𐰇𐰏 *ngafi* (上17) 吾に対する

𐰇𐰏𐰣𐰚 *ngafi-mifi* (上10) 吾等二人、𐰇𐰏𐰣𐰚 *ngi* (上28) -*mifi* 吾等二人

𐰇𐰏 *nafi* (上17) 汝に対する、𐰇𐰏𐰣𐰚 *nafi-mifi* 汝等二人の形がある。²⁸⁾

これらの語形は一人称代名詞属格形𐰇𐰏𐰣𐰚 *ngafi* (上25) 「我が」𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚 「我が子」𐰇𐰏𐰣𐰚𐰣𐰚𐰣𐰚 「我が身量」と共に他のテキストにはあまり見かけない特別な使用例であると言える。

法華経の西夏文には文法上特徴のある用法が少なからず出現している。

経典中の割注

スタイン収集黒水城文献の中に…懶𪗇𪗇 念觀門という表題をもつ小断片(上部欠)がある。その中に帳𪗇 tšia (平19) 𪗇dzö (上5) が使われるが、割注がついていて、その語が𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇 (左足で右足を押さえる) の意味であると説明する。漢語の結坐、結跏趺坐にあたり、半結坐(吉祥坐)を指すのであろうか。このような割注による解説は稀ではなく、その意味を正確に理解できるように示している。

韻書の解説

韻書『文海(宝韻)』の解説も大きい示唆を与えてくれる。たとえば平声43韻に属する𪗇 taw 卵にはつぎの解説が与えられている。

𪗇𪗇𪗇𪗇、𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇、𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇𪗇
tawとは𪗇dzan也。鳥が生んで未だ孵らざるは卵也、孵れば𪗇nahžihという。つまりtawは𪗇dzanで、卵が孵ると雛子(ひよこ)というと説明している。𪗇dzanはおそらく漢語 卵 lüan の借用形であって、𪗇nahžih は卵の子=ひよこを意味した。𪗇nahは蔵語sgo-ngaと同源であろう。

𪗇𪗇 𪗇dzanと𪗇𪗇 nahは漢夏双生字であった。

この法華経や金剛経に𪗇𪗇 卵生の使用例がある。

5. 仏典翻訳に見られる対訳関係

個々の西夏文字が表記する意味を解き明かすために行う確実な手順の一つは、上述のように漢文から翻訳された西夏訳仏典を対象にして、原文である漢文と当該西夏文を逐一照合するところに置かれる。

確かにこの照合という手続きは一つのbilingual textを造り出すもっとも基本的でしかも甚だ有効な方法であり、これまでに多くの研究者が効果をあげてきている。ところが一方で、そのような対照だけでは思わぬ落とし穴に入り込むのである。

とくに『法華経』は難解であり、漢訳と対照さえすれば、西夏文字の意味は直ちに判明するだろうという安易な先入観を、排除しなければならない。西夏人は翻訳にあたって、実際には意識したり任意に内容をとって訳したりしてお

り、ときには解釈の困難な場合があって、常に誤解誤訳を招く危険に満ちているのである。

A 単純な照合例

『法華経』を対象に漢文が如何に西夏語訳されているのか、その実態を長い脈絡を対象にして具体的に示してみたい。まず単純な照合例をあげる。

I 反対の意味になるもの

1. 漢文 ①爾時 ②弥勒菩薩 ③従座而起 ④偏袒右肩 ⑤合掌向仏……
西夏文 ①𐽀𐽁𐽂 ②𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆 ③𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇 ④𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇 ⑤𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇……

この文章は経典中しばしば出会う。西夏文も18字で訳されていて漢文原文と一致し、はじめの「その時」を別にすると四言句が4句並ぶ点も、西夏文と漢文はよく対応する。

①と②はとくに問題はない。西夏語で‘弥勒’ *mif* (平11) -*ti* (上7) は音写され、「菩薩」は‘情を悟る(もの)’と意識されている。③の西夏文を直訳すると‘坐する所(より)起き上がり’となり、動詞 *wor* (平89) には方向を示す接頭辞 *ʔa-* (上方に) が添接され、同時にその動作が完了したことをも示している。⑤は‘仏に向かい合掌する’であり、漢文と大きい異同は見られない。

問題は④の表現にある。一見すると、漢文を忠実に訳しているように見えるが、この西夏文には実は「右」も「袒(はだぬぐ)」も含まれていないのである。それに替わって‘左’と‘着る’がある。「偏に右の肩を袒ぎ」とある漢文に対して西夏文では‘左肩片方(のみ)を着て’と表現されている。𐽀 *phaf* (平17) は‘片方、片側’、𐽁 *ngʷif* (上10) は‘着る’を意味した。もし西夏文のこれらの文字の意味を正しく知らなければ、‘左’を「右」に、‘着る’を「ぬぐ」に当てて全く反対の意味に誤解してしまう危険がある。

II 自在な意訳

思いのまま意味をとって西夏語に訳している場合が決して稀れではない。中

国古典の翻訳でも難解な古文の意味を把握して、わかり易く西夏語で表現している。

たとえば『六韜』上巻文韜第一にある「卒に、太公自ら茅に坐して以て漁するを（周の文王は）見る」（卒見太公坐茅以漁）は西夏文では「①𐵓𐵔 ②𐵓𐵔𐵓 ③𐵓𐵔𐵓𐵔 ④𐵓𐵔𐵓𐵔 ⑤𐵓」‘①その時、②太公自ら③茅舎のそばで、④針を放ち魚を捕えるのを⑤（文王は）見る’と訳されている。この西夏語の表現では、針をたれて魚を釣る人、太公の位置を‘茅舎のそば’とはっきりととらえて、それを見る周の文王の行動が示されている。

もう一つ例を挙げよう。『黄石公三略』（中略）の中で「聖王の世を御するは盛衰を觀、得失を度りて、これが制を為す」「聖王御世、觀盛衰度得失、而為之制」とある一文は、西夏語で、「①𐵓𐵔 ②𐵓𐵔𐵓𐵔 ③𐵓𐵔𐵓𐵔 ④𐵓𐵔 ⑤𐵓𐵔𐵓𐵔」‘①聖帝は②盛衰を觀て③利害を度る（こと）が④即ち⑤帝の仕事なり’と訳している。西夏文の方がよく理解できるように思える。²⁹⁾

B 如来寿量品の検討

次にやや複雑な文章の対照例として如来寿量品第十六の一部を検討してみよう。（日本語訳は西夏文の訳である。以下同じ）

2. 漢文 我説燃燈仏等 又復言其 入於涅槃
 西夏文 𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔 𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔
 日語訳 我は燃燈仏等が、亦涅槃に入ると謂う

漢文の二つの文章（14字）が、西夏文では一文（10字）で訳されていて、意味が取りにくくなっている。最後の ?yi ‘謂う’の主語は文頭の我であることは、間違いない。tefi (平36) ni (上61) thafi (平17) ‘燃燈仏’及び niefi (上35) -pan (平24) ‘涅槃’は定訳語である。

3. 漢文 如是皆以 方便分別。
 西夏文 𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔𐵓𐵔
 日語訳 我は悉く方便に従い説きたるもの也

これは漢文の動詞文を西夏語で名詞文に訳している例である。「… 纘 … 𪗇」
 ‘…は…也’の基本構文を使って表現している。漢文にある主動詞「分別」に当
 たる動詞は西夏語にはない。𪗇 bifi (上10) ‘悉く、皆’。接頭辞Aを付けた‘説
 く’が使われている。rir²-tshieh。‘方便’ tshier (平78の上声) -?yü (上2) は定訳
 語である。

4. 漢文 若有衆生 来至我所 我以仏眼 観其信等 諸根利鈍 随所応度
 处处自説 名字不同 年紀大小 亦復現言 当入涅槃。

西夏文 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘
 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘
 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘

日語訳 もし衆生 (が) 我が処に出れば、我は仏眼を以って、その信等の
 諸根の利鈍を観察し、応に随い度脱して、名字の不同、身歳の小
 大を、諸々に演べ説き、後また涅槃に、入るべし ‘我は’ と謂う。

大体、四言句を以って逐語的に訳されているように見えるが (一ヶ所6言句
 がある)、詳しく見ると「亦復現言 当入涅槃」の「亦復た^{しめ}現して」の「現」
 に当たる言葉は西夏文にはなく、動詞‘入る’は1人称代名詞照応形式をもつ
 から、この文章は行為者視点文であることがわかる。その代名詞‘我’ははる
 かはじめに提示された主語 (行為者) nah と照応しているのである (下線部)。
 動詞語幹 - 代名詞 - 未来時称助詞の配置は標準語順であり、「名字の不同」、
 「年紀 (身歳) の大小 (小大)」は同じ内容を伝えるが、「随所応度」は‘応じ随
 い (適宜) 度脱して’ と訳される。‘衆生’は定訳語。‘度脱’ ‘演べ説く’は
 共に『同音』に登録される。

5. 漢文 如来 見諸衆生 樂於小法 徳薄垢重者 為是人説 我少出家
 得阿耨多羅三藐三菩提。 然我実成仏已来 久遠若斯。

西夏文 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘
 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘
 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘 𪗇 纘

日語訳 如来は諸衆生の中に、小法を愛樂し、徳薄く垢重き者を見るとき、是の故に直ちに出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得ると謂えども、我は実に成仏してより已来、それらの時（長い時）を過ごしたり。

この西夏文では、主格・対格などいずれも無標であり、格助詞はほとんど使われず、「成仏してより」の ?aŋ (上14) 於格・従格助詞のみが現れる。

漢文「我少出家」(少くして出家し)の「少」を訳した言葉は西夏文にはない。それに当たるのは‘それ故、直ちに’ mi(平30)-rur(平75)である。mirurは、『同音』で互用の注をもち一つの単語で、『文海』では「新たに、直ちに、これよりの意也」と注釈される。『法華経』にもかなりよく使われている。

mi-ndefi (上33) は ‘…と雖も、然れども’。「小法を樂える」は‘小法を^{わか}ndzu(平1)-ŋʷi(平8)愛樂する’と訳している。

最後の句「久遠なること斯くの如し」は‘これらの時を過ごしたり’と訳される。‘これら’は、纒鞞 thafi-niではなく、纒鞞 thafi-ŋʷiər(上78)を使っている。ŋʷiər ‘数’は、チベット文語(WrT.) grangs ‘数’、ビルマ文語 WrB.-kra ‘複数指標詞’と同源語である。ŋʷiər < *ŋgiər

これに続く良医譬のところは、次のように訳されている。

6. 漢文 諸子於後 飲他毒藥 藥發悶乱 宛転于地。

西夏文 𐽄𐽆𐽇 𐽄𐽆𐽇𐽈𐽉𐽊 𐽄𐽆𐽇𐽈𐽉𐽊 𐽄𐽆𐽇𐽈𐽉𐽊

日語訳 諸の子は、毒物を飲みたり。毒が動き悶乱し、地上に宛転せり。

漢文の「於後」と「他毒藥」の「他」は、西夏文には訳されていない。「藥發りて」は‘毒が動き’と表現する。毒には平声字と上声字があり、両者の間に実際にはどのような区別があったか明瞭ではないが、ここでは上声字の方が使われている。

𐽄 ndɔfi (上42) 毒草(食物の毒)? 草編を取る

𐽆 ndɔfi (平49) 蛇の毒 𐽈 phïow (上43) ‘蛇’と関係する

いずれにしても、漢語「毒」、WrT. *dug* ‘毒’、WrB. *a-tɔk* ‘毒’などと同源語である。³⁰⁾ *ndɔh-ti* (平67) ‘毒物’ と訳した *ti* は ‘食物’ の意味。ほかに 𪛗 *ndon* (上63) ‘毒を盛る’ がある (孝子伝)。𪛗 *mɔh* (上25) -*mieh* (平39) ‘悶乱’ は『同音』にあり、‘悶’ は ‘葬’ と類似するが別字である。

𪛗 *mɔh* (上25) 悶える (2B7)

𪛗 *hliɸ* (上10) 葬る (47A2)

「地上に転りころげる」𪛗 *(R) (?) -ñžie* ‘宛転する’ も、一単語として『同音』に入っている。

7. 漢文 是時其父 還来帰家。諸子飲毒 或失本心 或不失者。遥見其父 皆大歡喜 拜跪問訊 善安穩帰。我等愚癡 誤服毒藥 願見救療 更賜寿命。

西夏文 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗
𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗
𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗

日語訳 その時、かの父は帰りて、家に至り来たる。諸子は毒を飲みたるにより、或は本心を失い、或は本心を失わず、遥かに父を見て、大歡喜を起こし、皆跪き敬して問う。安穩に来たりたまえるか—汝は。我らは愚の故に、毒を飲みたり。唯、願わくは救い療し、命を賜らしむべしと謂う時

‘その時’ ‘諸子’ と ‘或は *tšhio* (平57) …或は…’ ははみ出しているが、その他は4言一句で整って訳されている。動詞 ‘帰る’ *loh* (平48)、‘来る’ *te* (上54)、‘飲む’ *thih* (平11)、‘失う’ *ndziu* (上52)、‘賜る’ *ɸziɔr*² はすべて接頭辞Aを取り、完了態で表現される。また主格・対格は無標示であり、於格のみに助詞 *ndɔh* (上42) が使われている。*kʷi* (平69) *mbiɔh* (平7) ‘跪き敬して’ の *kʷi* は漢語「跪」の借用形であろう。‘安穩 *noh* (上42) -*nde* (上30) に来る—汝は’ は、行為者視点文であるが、汝に照応する主語 (かの父) は近くに出て

いない。

‘唯、願う’ ləw (平43) -tj (平67) の‘唯’ ləwは、‘一’ ləwと同形式であり、おそらく同一の形態素であろう。ŋgĩʊh (上6) ‘救う’は漢語「救」の借用形であり、‘敬う’とは類似するが別の字形である。

纒 ŋgĩʊh (上6) 救う (漢語「救」など)

纒 rɛ (上66) 敬う (cf. WrT. zhe · sa ‘敬語、敬礼’、WrB. rou- ‘敬う’)

「賜る」は、kziɔr²-wi ‘賜らしむ’、使役形を取っている。

8. 漢文 父見子等 苦惱如是 依諸經方 求好藥草 色香美味 皆悉具足
擣篩和合 与子令服

西夏文 纒
纒 纒

日語訳 父は己の諸子等が、是くの如き苦惱を受けるを見るや、則ち諸療法により良き薬草を求め、良き色・香・味、皆悉く、具足せるを、擣き篩い混ぜ、諸子に飲ませたり。

この西夏文も、主格・対格は無標示であり、最後の一句にのみ与格助詞 ?yeh を使っている。

‘苦惱を受けつつある’ hle (?) -ndɛ (上33) の ndɛ は進行態を表現する。cf. WrB. -V-nei、‘薬’ tsɬ (平68) cf. 彝語 (南華) §1⁵⁵、(武定) §1³³、‘香’ li (上9)、‘味’ wj (平67) 漢語「味」の借用語、‘好い’ ŋq (上56) cf. WrB. kɔŋg-、納西語 ka³³、羌語 na。それぞれの語形について同源語あるいは借用語を想定できる。

‘皆悉く’ tɔh (上42) -zih (上10) も WrT. thams-cad と同源語であるかも知れない。təw (平47) -wi ‘擣く’は漢語「擣」の借用形であり、thu (平1) ‘篩う’、hlu² (平58) ‘混ぜる’は、tj (平67) と同称に緊喉母音化による使役態形成を示している。thu は WrB. ti² ‘ふるう’ と同源語であろう。

纒 tj (平67) ‘飲ませる’ 纒 hlu² (平58) ‘混ぜる’

噉 thi^h (平11) ‘飲む’ 𪛗 lu² (平1) ‘混ざる’

C 五百弟子受記品の検討

やや長い文脈の対照を続けてみよう。(五百弟子受記品第八・貧人繫珠喩)

「我等は、応に如来の智慧を得べかりしに、しかも便ち自ら小智を以って足れりと為したり」は、次のように西夏語に訳されている。

9. 漢文 ①我等④応得 ②如来③智慧 ⑤而便⑥自以 ⑦小智⑩為足。
 西夏文 ①𪛗𪛗 ②𪛗𪛗𪛗 ③𪛗𪛗 ④𪛗𪛗。⑤𪛗𪛗 ⑥𪛗𪛗 ⑦𪛗𪛗
 ⑧𪛗𪛗 ⑨𪛗𪛗 ⑩𪛗𪛗
 日語訳 ①我等は②如来の③智慧を④得るが理なり。⑤しかも⑥自ら⑦小
 智を⑧得たるにより、⑨大に替わる⑩と見なしたり。

漢文と西夏文は、ほぼ同じ内容を伝えているが、表現法はかなり相違する。まず「我等」「如来」「智慧」は問題はないが、「応得」は‘得るは理なり’と訳される。また「而便自以小智」は‘しかも自ら小智を得たるにより’と訳す。二つの「得る」は、同一形態素の双生字で表記され、𪛗 rir (平79) と𪛗 rir (上72)、平声字と上声字に書き分けられている。これは環境によって起こる変調現象を反映しているのであろう。(平/上-上/→上/平-平/) つまり、本来平声である rir 「得る」は平—平という環境で上声に転じたが、その変調形を上声字で表記していたことになる。〔付記1〕参照

「足れりと為したり」は‘大に替わると見なしたり’と訳している。𪛗 nifi (上10) は、機能を十分つかめない文末助詞である。𪛗 ʔufi (平4) ‘替わる’ 𪛗𪛗 ʔufi-tu (平58) ‘～に代わって’、の用法があり、𪛗 se (平33) ‘数える’ がついて ʔufi-se となり、漢語以為の意味にあてる。この用法は『長阿含経』などでしばしば使われている。

それに続く個所は次のようになる。

10. 漢文 ①世尊、②譬如③有人 ④至親友家 ⑤醉酒而臥。
 西夏文 ①𪛗𪛗、②𪛗𪛗 ③𪛗𪛗 ④𪛗𪛗𪛗𪛗 ⑤𪛗𪛗𪛗𪛗

日語訳 ①世尊よ、②譬えば③人有りて④親友の家において⑤酔いて臥せるが如し

「至親友家酔酒而臥」は‘親友の家において酔いて臥せるが如し’と訳され、「至る」「酒」に当たる語彙は使われていない。「酔いて臥す」は‘酔う’‘臥す’に完了態接頭辞が付き、連用形表現を取っていない。𐽄 ndɔfi（上42）は場所を示す。𐽄 ndafi（上17）、𐽄 nafi（平20）は動詞接頭辞A。

11. 漢文 ①是時②親友 ③官事⑤当行。

西夏文 ①𐽄𐽄、②𐽄𐽄 ③𐽄𐽄𐽄 ④𐽄𐽄 ⑤𐽄𐽄𐽄

日語訳 ①その時、②親友は③公事により④余所に⑤行かんと欲し行く時

② nehi（上33）-wi（平67）‘親しい友’。③ kon（上47）-na（上56）‘公事、公用’。④ *dzehi（上33）-liɛ（上68）‘別の方’。⑤ šihi（平29）-kiɛ（上53）‘行かんと欲する’。kiɛは欲求の助動詞。cf. WrB. -khyang-

① 𐽄 dzehi（上42）と⑤ 𐽄 mbehi（上33）は共に‘時’の意味で、ほとんど区別なく使われる。この文章では、漢文の8字が西夏文では13字に訳されている。

12. 漢文 ①以無価②宝珠 ③繫其衣裏与之④而去。

西夏文 ①𐽄𐽄 ②𐽄𐽄𐽄 ③𐽄𐽄𐽄𐽄 ④𐽄𐽄 ⑤𐽄𐽄𐽄

日語訳 ①無価の②宝珠を一つ③彼の酔者の④懷の中に⑤持たしめたり

① piɥ（平59）-mehi（平36）‘無価’。② kzi²（平69）-žwi（上60）‘宝珠’。𐽄 ngi（上28）「ある一つ」。無標の対格。③ thafi（平20）‘彼の’。la（上15）-miɛ（上68）‘酔者’。ɣyehi（平36）‘の’は属格助詞。④ phon（平54）‘懷’、ɣu（上1）‘の中’。⑤ tšhīu（平2）-wi（平10）‘有らしめる、持たせる’。-wiは使役助詞。③漢文「繫（かけて）…与え」を‘持たせる’と訳し、その場所を‘懷の中に’としている。④漢文「而去」に当る語は西夏文にはない。漢文13字は西夏文で14字になる。

13. 漢文 ①其人酔臥 ②都不覚知 ③起已⑤遊行 到於④他国。

西夏文 ①𐽄𐽆𐽇 ②𐽄𐽆𐽇 ③𐽄𐽆𐽇 ④𐽄𐽆𐽇 ⑤𐽄𐽆𐽇

日語訳 ①酔人は②知らず。③目覚めて④後、諸国を⑤遊行し

①la (上15) -ⁿdzĩɔfi (上44) ‘酔人’。②mi (平30) -ⁿdz^wɣ (平27) ‘知らず’。
③·afi (R?) -mi (上7) -ti (上60) ‘目覚めて’、④niŋ (平57) ‘後’、‘諸国を’
(無標)、⑤thaw (上19) -ⁿdzɛfi (平35) ‘遊行する’。³¹⁾

14. 漢文 ②為①衣食故 ④勤力求索 ⑥甚大⑤艱難

西夏文 ①𐽄𐽆𐽇 ②𐽄𐽆𐽇 ③𐽄𐽆𐽇 ④𐽄𐽆𐽇 ⑤𐽄𐽆𐽇 ⑥𐽄𐽆𐽇 ⑦𐽄𐽆𐽇

日語訳 ①食衣を②求める故に、③諸々に④力を貸し、⑥甚だ大きい⑤艱
難を⑦経て

①ⁿdzifi (上10) -ŋg^wifi (上10) ‘食衣’。②?iŋ (上2) ‘求める’、niŋ (平57) ‘故
に、ために’。③riŋ (平76) -riŋ ‘諸々’。cf. WrT. re-re、④?iɛ (平9) tsr
(平77) ‘力を売る’ ‘雇われ働く’ ‘力を貸す’ (『孝子伝』)。⑤ŋiɛ (平9) -xiɛ (平
74) ‘難行’。⑥ⁿdzɛfi (平35) ‘甚だ大きい’。⑦la (上15) ‘経る’。

15. 漢文 ①若少②有所得 ③便以為足

西夏文 ①𐽄𐽆𐽇 ②𐽄𐽆𐽇 ③𐽄𐽆𐽇 𐽄𐽆𐽇

日語訳 ①極わずかな②財を得て③足れりと見なせり

①kzɪr (平92) -zɛ ((平61) ‘微少’。②?war (上73) ‘財、物’、rir (平72) ‘得
る’。③wiŋ-hli (?) ‘足りる’、?uŋ (平4) ‘替わる’、sɛ (平33) 数える、?uŋ-sɛ
‘見なす’。

16. 漢文 ①於後②親友 ③会遇見之 ⑤而作是言

西夏文 ①𐽄𐽆𐽇 ②𐽄𐽆𐽇 ③𐽄𐽆𐽇 ④𐽄𐽆𐽇 ⑤𐽄𐽆𐽇

日語訳 ①後に②かの親友と③遇いたり。(親友は) ④罵りて⑤語り言わく

①klu (平58) -ⁿdzɛfi (上33) ‘その後’。②rir (上72) ‘と’ 格助詞。③·a-mbir
(上71) ‘偶然に会う’。④hmin₂ (上29) -ŋ^wu (上1) ‘罵る’ の連用形。⑤na (上

56) -ʔyɪ (上28) ‘語り言わく’。共に12字になっているが、漢文にはない‘罵り’が西夏訳文に加えられている。

17. 漢文 咄哉①丈夫 ③何為④衣食 乃至⑤如是

西夏文 ①𐵇 ②𐵇 ③𐵇𐵇、④𐵇𐵇𐵇𐵇、⑤𐵇𐵇 ⑥𐵇𐵇 ⑦𐵇𐵇

日語訳 ①汝は②今③何故に、④衣食を求めんがため、⑤是くの如き⑥甚
苦を⑦受けるか—汝は

①nɪh (上10) ‘汝’。②seɪh (平36) ‘今’。③theɪh (上33)-sɪɔɪh (上44) ‘何故に’。④衣食を求める故に。⑤thi (上28)-sɪuɪh (上3) ‘是くの如き’ ⑥tʂi (平67) ʰdʒɛɪh (平35) ‘甚だしい苦痛’。⑦hli (上60?) ‘受ける’のB形式。添接代名詞 naɪh (上17) を付けて、主語nɪhと照応する行為者視点文を構成している。漢字12字に対して、西夏文14字が当たる。

18. 漢文 ①我②昔⑥欲令 ③汝得安樂 ④五欲⑤自恣

西夏文 ①𐵇 ②𐵇 ③𐵇𐵇𐵇𐵇 ④𐵇𐵇 ⑤𐵇𐵇 ⑥𐵇𐵇𐵇 ⑦𐵇

日語訳 ①我、②昔、③汝を安樂にして④五欲を⑤自在に⑥受けるよう祈
る⑦故に

①ɲaɪh (上14) ‘我’。②ʂi (平10) ‘昔、以前’。③‘汝を’、ʔyɛɪh 対格助詞、noɪh (上42)-re (上66) ‘安樂’。④ɲʷɪɪh (平27) -kɪɛ (上53) ‘五欲’。⑤ʔyɛɪh (平36) -ʰdʒɪuɪh (上3) ‘自主=自在’。⑥wɛɪh (上32) -hle (?) ‘受けるよう望む’、祈求接頭辞が付く。hle (?) はA形式、中立構文を取っている。ʔyɪ (上58) ‘謂う’がなぜ挿入されるのか、不詳。⑦nɪo (平57) ‘故に’。漢文12字に対して西夏文は14字になる。

19. 漢文 於①某年②日月 ③以無価宝珠 繫汝衣裏

西夏文 ①𐵇𐵇𐵇 ②𐵇𐵇𐵇 ③𐵇𐵇𐵇𐵇𐵇 𐵇𐵇𐵇𐵇𐵇𐵇𐵇𐵇

日語訳 ①何年何月②何白日の下、③無価の宝珠一つを、汝の懐の中に持
たしめたり—汝に

①waf (上14) ‘何’、疑問代名詞。cf. WrB. *bha* 経典中に使われる「某甲」は通常、𐤆𐤍𐤏𐤃 ‘誰それ’ で訳される。kīaw (平45) ‘年’、hli (上60) ‘月’。②hnin (上29) mbi (上7) ‘白日、白昼’、khīufi (平3) ‘～のもと’。③上述p.220参照。ここでは、-wi ‘～する’ 語幹 A形式の後で、添接代名詞 2人称 naf は、先行の与格・対格助詞をともなう nifi ʔyefi ‘汝に’ と照応して、受益者・受動者 (与格・対格) 視点文を構成している。

20. 漢文 ①今故②現在 ③而汝不知④勤苦憂惱⑥以求⑤自活 ⑧甚為癡⑨也
 西夏文 ①𐤆𐤍𐤏𐤃 ②𐤆𐤍𐤏𐤃。③𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃 ④𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃 ⑤𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃 ⑥𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃
 ⑦𐤎𐤏𐤃 ⑧𐤎𐤏𐤃 ⑨𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃 ⑩𐤎𐤏𐤃
 日語訳 ①而して②現に有り。③汝知らずして、④甚大なる苦惱を経て⑤背・喉を⑥乞い求む－汝 ⑦は、⑧真に愚か⑨なり－ 汝は⑩也。

①thi (上28) -wif (上27) ‘これより、この今’ ②mīor² (平90) ‘現に’、‘現実に’ 有り。③上述p.220参照。④tšj (平67) -žj (平67) ‘苦惱’。⑤wīor² (平90) -nefi (平36) ‘背中と喉’、漢語「自活」に当たる。‘衣服’と‘食物’を指す西夏語特有の表現である。³²⁾ ⑥kīu (平59) -ʔyīof (上44) ‘乞い求める’。ʔyīof は𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃 (上2) のB語幹形式。naf は主語と照応する行為者視点文である。⑦tafi (平20) 主格または主題の助詞。⑧žuf (上25) ‘愚’、ʔyīε (平34) ‘真なる’。⑨ŋ^wu₂ (上1) 不変化詞 ‘～なり’、naf ‘汝は’、やはり主語と照応する。⑩lif (平29) 文末の断定の助詞。cf. WrB. *-lei*

21. 漢文 汝今可以此宝 ①貿易③所須 常可④如意 ⑥無所乏短
 西夏文 𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃 ①𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃𐤏𐤃。②𐤎𐤏𐤃 ③𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃 ④𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃 ⑤𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃 ⑥𐤎𐤏𐤃𐤏𐤃
 日語訳 汝、今、かの宝を①売る (ならば)－汝は。②則ち③必要なものの④意の如く⑤皆有り、⑥無きことあらずと謂う

①ndafi (上17) -žiofi (上44) -naf ‘汝は売る’。žiofi は𐤎𐤏𐤃 R? ‘売る’ のB語幹形式、naf ‘汝’ は、主語と照応する行為者視点文である。②ku (平1) ‘則ち’。③šofi (平48) -šofi ‘必要なもの’、「所須」に当たる。④phif (平

11) -mbiufi (平3) 「如意」。⑤ žifi (上10) -ndiufi (平3) ‘悉く有る’。⑥ mifi (平11) -mefi (平36) ‘無きことなし’。漢文18字は、西夏文17字で訳出されている。

6. むすび

以上挙げた対照例から判明するように法華経の西夏文はかなり整った形態を持っている。西夏書写語が設定された初期の段階を越えて、多量の経典の翻訳を通して、西夏語自体が格段と推敲された以後の文章を代表しているのであろう。動詞の二語幹の使い分けに基づいた行為者(主語)視点文と受動者・受益者(目的語)視点文がはっきりとした形態でしばしば使われている。そしてときに変調現象もよく記録されている。私はこの法華経を部族語形式を反映した西夏全盛期の書写語を代表する形態を具えた資料として位置づけたい。

<注>

- 1) 西夏国及びその周辺地域には11世紀には数多くの蔵語群および彝緬語群に属する言語が分布していたが、大部族であった羌族はじめ嘉戎族も普米族も独自の書写語を造らなかった。それは7世紀以来吐蕃王朝に支えられた蔵語の力が強大であったためであろう。文字についても同じことが言える。

李元昊が建設した西夏国はその圧力から抜き出て西夏語という独自の書写語を造り上げたのである。党項語(諸々の党項羌族の口語)が西夏語創作のための大きい基盤を提供した。

西夏の地は8世紀以降或いはそれよりずっと以前から党項語のほかに漢語(西北方言)蔵語などが錯綜して分布する多言語地域であった。西夏人はおそらく漢語のほかに蔵語アムド方言乃至はカム方言を話していたであろうと考えられる。

- 2) 西夏族という民族は存在しない。西夏人自身は𐰃𐰆𐰏𐰤 mifi -ndziŋfi (西)夏人と呼んでいた。中国の諸民族を含めて中国人と呼ぶように、(西)夏人はミ族、ミニャック族など種々の構成部族を総括して夏人と言っていた。

この自称の対応関係は、部族語の特徴を示すとともに、西夏語自体の構造を探求する上で、大きい意味をもってくる。

- 3) そのほか𐰃𐰆𐰏𐰤 hl'ę -ndzi (?)や𐰃𐰆𐰏𐰤 hliŋfi (上10) も使われた。別の有力部族群なのであろうか、共に漢字夏から転じた偏を使っている。
- 4) 筆者は法華経は恵宗の時代の訳であったと考えている。西田「西夏語訳法華経について」『東洋学術研究』2002年。
- 5) 拙論「西夏の仏教について」『南都仏教』1969年のち『西夏王国の言語と文化』1997年所収、p. 403～。

『元史』によると大徳六年から仁宗の皇慶元年の間に河西大蔵経は計五回刊行

されたとある。(成宗紀)

- 6) 拙著『西夏文華嚴經』Ⅱ、あとがき西夏譯經雜記、1976年参照。
- 7) 拙文『西夏大字刻文』『西夏小字刻文』など、村田治郎編著『居庸関』京都大学工学部刊、1958年。
- 8) 史金波・白浜『明代西夏文經卷和石幢初探』『考古學報』1977年第一期。
- 9) 注8。
- 10) 西夏語の一生については別に述べてみたいが、13世紀までの河西時代については各文献を丹念に調べる必要があつて厄介である。西夏語の文体には大雑把に言つて二つの流れがあつた。
 - 一、単純文体 二列系の接頭辞はよく使われるが動詞は一語幹で後置する代名詞はなく、照応関係の異なる二種の視点文も認められない。
 - 二、複雑文体 二列系の接頭辞が使われるほか、動詞に二語幹があり、後置する人称代名詞の照応関係が異なる二種の視点文を構成した。

前者は擬漢文体であり、整った文章語として発展し、各種の碑文公文書に使われるほか仏典の訳文にも常用された。後者は部族語形態をよく反映した文体として主に仏典の翻訳に使用されたと考える。
- 11) 西夏文には言葉のレベルでは同じ一つの単位であるが、字形上の差異に依存して視覚的に意味の弁別を示す場合も少なくない。たとえば

老人 𐵇𐵆𐵏 mah (平20) 𐵇𐵆 (上51)

老畜 𐵇𐵆𐵏 mah (平20) 𐵇𐵆 (上51)

同じ𐵇𐵆を人間と家畜で書き分ける。mahも𐵇𐵆も‘老いた’を意味する。(cf. WrB. *ʔou-mang*² ‘老いぼれる’)
- 12) 拙論「西夏文字新考」1997年以來提案していたが「西夏文字の特性」1998年(沈陽論文)で双生字という用語を提唱した。西田『西夏語研究新論』1998年所収。
- 13) 拙著『西夏語の研究——西夏語の再構成と西夏文字の解説』Ⅰ、座右宝刊行会、1964年。
- 14) 拙論「西夏語韻図『五音切韻』の研究」上、中、下、『京都大学文学部研究紀要』20~22、1981年~83年。
- 15) 平声韻小類の重出韻の存在も問題になる。ここで形態論的視点といったのは、たとえば𐵇𐵆 mbeh (上33) 高い：𐵇𐵆 mbɛ (平61) 高めるなどの対応から一時は後者をmbɛに改めるべきかと考えたが、その後、接頭辞系列AとBの間でも同じ様な-eh : -ɛhの混淆がある事実から見て西夏語では-eと-ɛが何らかの条件で任意に移動し得たのではないかと思ひ至りその修正を再考している。

また、『文海(宝韻)』の体系が部族語の諸体系を総合したものではないかという大きい検討課題も残っている。cf. 拙論「西夏語文法新探」2004年。
- 16) 拙論「西夏語『月々楽詩』の研究」『京都大学文学部研究紀要』25、1986年、のち『西夏王国の言語と文化』に修正所収。
- 17) 『文海(宝韻)』の解説が実際の文献上の使用例と合致しない場合がある。たとえば𐵇𐵆 hlɿuは『六韜』などで‘旬’(十日間)の意味で使われるが、文海の解説(平59韻)ではそれに全く触れていない。cf. 拙論「西夏語訳六十四卦と鍼灸書」

2004年。

- 18) モリス「西夏の文字と言語の研究に対する初歩的寄与」パリ、1904年。
- 19) 駱駝 𐽀𐽁 x^wɔfi (上42) -thafi (平17) の駝は同じ対応関係を示している。西夏語のラクダにはほかに 𐽀𐽂 lafi-ndi と 𐽀𐽃 min-tšiu があるが、その来源は全く不詳である。また仏塔 𐽀𐽄 mbɛfi-ndufi も漢語 浮屠(浮图)からの借用形であったと考えている。
- 20) 拙文「西夏語研究と法華経」I、2005年、『東洋学術研究』。
- 21) 注16の拙論に詳しく述べている。
- 22) 以下は西夏語訳『十二縁生祥瑞経』から取った。
- 23) ウイグルにも十二直は伝播していたようで、楊富学氏は‘建除満’歴法体系としているが実質は十二直である。やはり吉凶の判断に使われていたのであろう。「榆林窟回鶻文題記譯釋」楊富学『西域敦煌宗教論稿』甘肅文化出版社、1998年、p.79。なお拙論「黒水城出土西夏文献について」『日本学士院紀要』第60巻第1号、2005年参照。
- 24) この𐽀は『七仏八菩薩陀羅尼経』に出てくる。𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅 百千万億𐽀。漢訳文では女偏の𐽀を使っている。
- 25) 𐽀𐽆 rar-naw はI層の語形かもしれない。𐽀𐽇 tu (平58) は確かに彝緬語形である。西夏-u:^{wrB} -ɔng、-ɔkには次の対応例がある。𐽀𐽇 tu (平58) 千:^{wrB} thɔng、𐽀𐽈 tu (平58) 檻:^{wrB} tɔng²、𐽀𐽉 lu (平58) 石:^{wrB} kyɔk<klɔk、𐽀𐽊 lu (平58) 蛆:^{wrB} lɔk。
- 26) これは五言頌の中に出てくる形であるため五字にしたのであって正しくはやはり 𐽀𐽇𐽈 と書いたのであろう。(付記2参照)
- 27) 拙著『西夏文華嚴経』I、II、III、京都大学文学部、1975年~77年参照。
- 28) 『金剛経懺悔滅罪伝』ではこの二語を単数として使うところがある。
- 29) 西夏語訳『黄石公三略』は全体が意識されており逐字的対応を示さないところがあり難解である。
- 30) 『千手千眼観世音菩薩陀羅尼経』では蛇蟲の毒は平声字 𐽀𐽋 で書き、毒薬の毒は上声字 𐽀𐽌 (上42) で書いて使い分けている。また『七仏八菩薩陀羅尼経』の中に毒は数個所で出てくるが、いずれも平声字である。
- 31) このフォント文字の字形は誤っている。偏は筆者の部首(求部)であって(𐽀𐽍 ‘求める’と同じ偏)、𐽀𐽎 筆者の153門部ではない。『同音』旧版19B5、新版20A6に入っている。
- 32) 拙文「背中とのど」『西夏王国の言語と文化』p.278~所収。

付記

1. 声調変化は西夏口語で規則的に起こったため、西夏人は変調形を表記する専用字を創っていた。上記の 𐽀𐽇 (平声字) と 𐽀𐽈 (上声字) のほか、たとえば 𐽀𐽉 低高(階級)は本来の上声・上声の連続が平声・上声の連続に変調したためその変調形を 𐽀𐽊 𐽀𐽋 で表記することが多かった。その種の口語形の記録は『掌中珠』の中に 𐽀𐽌 𐽀𐽍 𐽀𐽎 ndziɔfimbifi-mbefi sefi² 人有高下(人には階級がある)の例があるほか、『法華経』に

も認められる。「かの娑婆世界には高下ありて等しからず」の高下を𪛗𪛗ではなく𪛗𪛗(平声・上声)で書いている。正に口語形式の反映である。

漢字では字形で弁別しなかった諸々の言語現象を西夏人は字形自体で弁別し表記することを考えた。声調の対立、変調現象、品詞の違い、動詞の屈折形などの音形式の相違を字形で弁別した。これは漢字系文字の中で起こった日本の仮名の創造に比肩し得る大革命であったと言い得る。(西夏文字は擬似漢字の一つである。cf. 西田『アジア古代文字の解読』中公文庫 B7.2002.p. 287)

2. 上掲の西夏語の分数表現は、藏語形と一致しない。(数詞) Xの中の(数詞) Yの表現は、次の羌語(桃坪)、普米語、阿儂語、僂僂語、錯那門巴語に近いように思える。

羌語	dʒ ³³	xdzɔ ³³	xte ³¹	a ³¹	xdzɔ ³³	四分之	
	四	分	中(の)	一	分		
普米語	sāu ¹³	by ⁵⁵	go ⁵⁵ γu ¹³	nāu ¹³	ti ¹³	by ⁵⁵	三分之
	三	分	の中	の	一	分	
阿儂語	som ⁵³	thur ⁵⁵	duŋ ³¹ kha ³¹	thi ³¹	t hu ⁵⁵	三分之	
	三	分	中	の	一	分	
僂僂語	ɲi ³¹	tsh ⁴⁴	fu ⁵⁵	khua ⁴⁴	ɲua ³¹	fu ⁵⁵	二十分之
	二	十	分	中	の	五	分
錯那門巴語	sum ⁵³	ko ³¹	neŋ ³⁵	ki ³¹	the ²⁵³	三分之	
	三	個	中	の	一		

スタイン収集大手印関係経典の断片(経名不詳)の中に見られる𪛗𪛗𪛗𪛗 三分之一、𪛗𪛗𪛗𪛗 三分之二のように𪛗 phiě (上8) 開く、解くを使った表現も分数であったと考えられるが、これは藏文からの訳文であるかもしれない。

藏文語		gsum	cha	cig	三分之	
					一	
瑪曲アムド方言口語		hsəm	t̪chi	fi̪pi	三分之	
					二	
			(gsum	cha̪i	gnyis)	
cf. 哈尼語	sɔ ³¹	bi ⁵⁵	t̪chi ³¹	bi ⁵⁵	三分之	
	三	分(の)	一	分		
基諾語	sø ⁴⁴	pø ⁴⁴	thi ⁴⁴	pø ⁴⁴	三分之	
	三	分(の)	一	分		

3. 卷五は活字本であろう。数個所活字が上下転倒して組まれている。

卷七も活字本である可能性が大きい。字形が大小不揃である上に、所々印面を修正している。

参考文献

法華經漢文は坂本幸男・岩本裕『法華經』上・中・下、岩波文庫（昭和43年刊）によっている。西夏文は西田龍雄編『西夏文「妙法蓮華經」写真版（鳩摩羅什訳対照）』創価学会、2005年による。

注にあげた現代蔵緬諸言語の形は、孫宏開編著『羌語簡志』はじめ各種語言簡志（民族出版社刊）及び黃布凡主編『蔵緬語族語言詞彙』中央民族学院出版社1992年による。阿儂語は孫宏開・劉光坤『阿儂語研究』民族出版社2005年に、瑪曲蔵語は周毛草『瑪曲蔵語研究』（民族出版社2003年）にそれぞれよっている。

（にしだ たつお／京都大学名誉教授）

*訂正

東洋学術研究44巻第1号掲載の『西夏語研究と法華經 I』について以下、訂正いたします。

p. 19・13行目

（『大正新脩大蔵經』 pp. 128 - 130とpp. 142 - 146）

→p. 50（中）24行 - （下）4行、p. 51（上）26行 - （中）26行

p. 19・14行目

（『大正新脩大蔵經』 pp. 236 - 238最後）

→p. 56（中）13行 - （下）1行

p. 21・9行目

a. 卷三藥草喩品（第五完本としているが、実際は8行残）

→a. 卷三藥草喩品 第五（完本としているが、実際は8行残）

p. 24・27行目

1) 法師品第七（56行）

→1) 法師品第十（56行）

p. 31・2行目

問題は少くないが、

→問題は少ないが、

(26)

p. 32・下から4行目

菟 泥候

→菟 泥候

p. 43・5行目

7) グリンステット編

→グリンステッド編

p. 43・31行目

12) 郵楼哆郵楼哆₃₈ 橋舎略₃₉に改めた。

→郵楼哆₃₈ 郵楼哆橋舎略₃₉に改めた